

---

# 赤い糸

皿尾 りお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い糸

### 【Zコード】

N4148D

### 【作者名】

皿尾 りお

### 【あらすじ】

あなたの赤い糸は、誰に続くのだろう・・・

彼は、いつも、バス停から花屋を見ていた。

始めは、気にも止めなかつた。

彼は、ある日、白い杖を突きながら店に入つて行く彼女を見た。

その日からだ。

そこで、働く彼女。

高校からの帰りのバスを待つ間。

バス停の向かいの花屋。

彼女は目が見えない。

白い杖を見るまでは、わからなかつた。

バスを待つ間は、いつも、彼女を見ていた。

花屋で客に笑いかける彼女。

彼女の笑顔は、店先のどんな花より可憐に見えた。

毎日、見つめた。

毎日。

彼は恋に落ちていた。

花を買おう。

そつ、思つた日から毎日、花を買った。

バス停近くの横断歩道を渡り、毎日、花一輪。

「これ、下さい。」

そつ言つて、彼女に手渡す。

「スマイルですね。」

彼女は、手渡しただけですぐにわかり、微笑む。

「これ、下さい。」

「カスミソウですね。」

そつ言つて、微笑む。

それだけの、関係。

たつた、それだけの。

それだけで良かつた。

雨の日も。

晴れた日も。

そして、とても、晴れた日。

彼は、いつも通り、横断歩道を渡るひつとした。

・・・車が来た。

・・・彼は、渡り切れなかつた。

花屋の店先はもう、目の前。

彼は、その薄れゆく意識の中、彼女の背中を見つめていた。

薄れゆく意識の中。

流れだす血。

流れる血。

花屋の店先まで流れ出す。

彼女の足元まで流れ出す。

彼女は、ふと、振り返る。

ゆっくり、しゃがみこむ。

しばらく、地面を見つめる。

彼女の頬を涙が伝つ。

こぼれ落ちた涙が、血と混ざり合つ。

それは、見た事もない美しい色だった。

きっと、彼女しか見えないような・・・

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4148d/>

---

赤い糸

2010年12月1日07時14分発行